

平成21年度「金沢ユネスコ・スクール推進事業」実施報告書・各学年情報シート			
学校番号	44	学校名	金沢市立 朝日小学校
学年	4年	テーマ	環境教育

「日本の宝 竹」

～日本の文化である竹を見直そう～

1 主な学習内容

朝日小学校のグラウンド横には、竹林があり、毎年4月の下旬に保護者を交えて、竹の子ほり集会を行っている。子どもたちにとって、竹は身近な存在であり、校区にもたくさんの竹林が見られる。しかし、植物としての竹の特徴や、古来より日本人の生活を支えてきた竹の文化について詳しく知っているわけではない。

そこで、まず、竹を観察していくことから学習を始めた。竹の子を縦にわると、小さい時から竹の節を作る準備をしていることに気づき、成長記録を取りながら、その成長の速さに驚いていた。さらに、竹林の土を掘り進めると竹の1本1本が根で繋がって成長し、一つの命のようにしていることを発見した。

また、30cm物差しや1m物差し、筆、花瓶など、自分たちの身の回りに竹製品があることに気づき、他にも竹を利用したものがないか、聞き取りやインターネットを使って調査した。そして、日本人は昔から竹を生活道具や楽器、おもちゃ、建築資材として、様々な材料として使い生活してきたを知った。特に、和室や日本風庭園、茶道具を見ると、たくさんの竹が使われ、竹は日本の文化そのものとの関係が深いことに気づくことができた。

子どもたちは、グラウンド横の竹を切り出し、コップやお皿、ビー玉迷路、竹琴、門松などを楽しんで作りながら、竹の成長の速さにより材料の入手が容易であること、他の材料に比べ軽量で、しかも加工がのしやすいなど、竹の良さを十分に実感することができた。

そんな中、植物観察の専門家であるO先生より、「現在では、洋風の生活様式とプラスチックにその地位を取って代われ、逆に竹林の広がりや人間の生活の害になっている。」という竹のマイナス面を教えていただいた。竹の良さを感じている子どもたちにとっては、大変ショックな現実であり、大きな課題となった。この問題を解決するには、竹をもっと利用することが一番である。そこで、竹の利用を進めることを目的とした発信を行うことにした。発信内容は、以下の5つである。

- ・竹の加工の簡単さと楽しさ
- ・竹は日本の文化であること
- ・竹林の害
- ・新たな竹の利用法として、竹炭の紹介と配布



- ・自作の竹琴による「ドレミの歌」と「ジングルベル」の演奏

現在竹の利用として一番注目されている竹炭作りを体験し、竹炭の効能を実験し、多くの人に発信しようとしている。

2 持続発展教育の視点

竹を利用した生活を日本の文化としてとらえ、他国と比較することで、国際理解を深める1つの手段とすることができる。また、昔は重宝されていたのに、今では、人間生活の邪魔者になっている竹の問題を考えることは、限りある資源を利用するという考え方に繋がると考える。